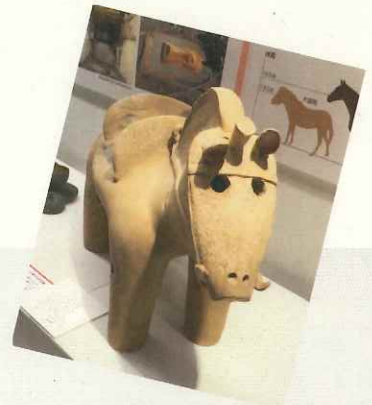




なぜ群馬では馬形埴輪が
多く出土したのか



太田市立太田中学校 1年

志村 萌々香

1 きっかけ・このテーマにした動機

私は、学校のクロームブックでデジタル版『東国文化副読本』を読み、いろいろな動物の形をした埴輪、「動物埴輪」があることを初めて知りました。馬や水鳥など、たくさんの種類の埴輪があり、1つ1つがそれぞれ少しずつ形や表情が違って、見ているととても面白くなりました。思い返せば、私の通っていた小学校の校長室の前の棚には、いつも何かの形をした埴輪のレプリカがたくさん飾ってありました。当時は特に何も考えずに素通りしていましたが、もしかしたら馬や水鳥、鹿や猪などの動物埴輪もあったのかもしれない。



馬形埴輪のレプリカ（写真①）

私は動物埴輪の中で、特に馬形埴輪に興味を持ちました。そして、東国文化副読本に『馬の埴輪が多数出土！』と書いてありました。私は、「なぜたくさんの馬形埴輪が群馬で出土したのだろう」と疑問を持ったので、これをテーマとして調べることにしました。

2 調査

まず、始めに群馬の馬形埴輪について調べてみました。群馬の埴輪を調べたかったので群馬ポータルサイトで調べると、馬形埴輪について2つの記事がありました。

『歴史を語る「ぐんまの埴輪（はにわ）」2』の記事には

本県から出土した動物埴輪の9割以上は馬です。当時、馬は財力や権限の象徴とされ、上毛野国では盛んに生産されていました。

と書かれていました。群馬の動物埴輪のうち、馬形埴輪がこれほど多いことに驚きました。

『もっと埴輪（はにわ）について学んでみよう！』の記事には

群馬県内で出土した馬形埴輪（うまがたはにわ）は350例以上といわれ、全国的に見ても非常に豊富な数量を誇ります。当時、財力や軍事力、権威の象徴で非常に大切な存在であった馬がたくさん飼育されていました。

と書かれていました。やはり、群馬県で出土した馬形埴輪の数は多い、ということがわかりました。また、動物埴輪は、群馬県だけでも約390体もあるということがわかりました。

これらの記事の中から、私は当時①馬は権力の象徴だった、②群馬県では馬を飼育していた、の2つに注目しました。以降、この2つについてより詳しく調べて、なぜ群馬から出土した馬形埴輪の数は全国的に見ても多いのかを解明していきたいと思います。

①馬は権力の象徴だった!?

そもそも、もともと日本に馬はいたのでしょうか。もともといなかったとしたら、中国や朝鮮半島のほうから伝わってきたと考えられます。きちんとした確証を得るため、インターネットで調べてみることにしました。

乗馬のはじまり

日本に馬が登場するのは、古墳時代の中ごろ、西暦5世紀のはじめ頃といわれています。縄文時代や弥生時代の遺跡から馬の骨が出土したという話もあり、もっと古くから日本列島に馬がいた可能性はありますが、今のところ確実ではありません。有名な中国の書物『魏志倭人伝』も、弥生時代の日本について「馬なし」と記述しています。

4世紀の終わり頃、朝鮮半島北部の高句麗好太王（こうくりこうたいおう）の碑文が伝えるように、倭（わ）（近畿地方を中心とする勢力）が高句麗と戦いを交えたようですが、その中で、高句麗の騎馬戦戦力の強さに触れ、戦いに馬を使う必要を感じるようになったのでしよう。

これが、倭の人が乗馬を始めるようになったきっかけの一つと思われます。したがって、日本列島における馬の使用と乗馬は、戦いの手段、軍備の一部として始まったようです。



高句麗の戦いの様子（画像①）

乗馬のひろがり

古墳時代の馬の使用と乗馬の様子をうかがい知ることは容易ではありませんが、古墳におさめられた馬具は、その一端を伝えるものとして重要な手がかりになります。

最も古い5世紀はじめ頃の馬具は、近畿地方を中心に出土しており、岡山県下では今のところその時期の馬具は知られていません。県下（岡山）ではやや遅れて5世紀の中ごろから馬具が見られるようになります。またこの頃から馬をかたどった埴輪に置かれるようになりますが、埴輪の馬にも馬具が付けられています。（『乗馬の風習』より抜粋）



この資料から、馬は朝鮮半島から日本（近畿地方）へと伝わり、ヤマト王権（近畿地方）を中心に日本へ広がっていったということがわかりました。また、馬を持つことにより、「私は朝鮮半島と繋がりの強いヤマト王権と仲良し（繋がりが強い）です！」ということを示すことができるため、馬は財力や権力の象徴であったと思われます。ヤマト王権は日本の中ではとても力があったので、ヤマト王権と繋がることで、権力が強い事を示せます。財力に関しては、ヤマト王権と交易したりすることで、朝鮮半島から入手された鉄などをもらうことができると考えました。

また、別の見方をすれば、ヤマト王権の力は、当時馬が伝わったところにまで及んでいないはずですが。群馬からたくさんの馬形埴輪が出土しているということは、近畿地方から離れた群馬でも、ヤマト王権に従っている豪族などが多かったことを示していると思います。

②群馬県では馬を飼育していた!?～なぜ群馬で?～

私は、この②の問題について、1つ疑問があります。それは、なぜヤマト王権から遠い群馬で馬を育てていたのか、です。群馬の『ぐん！とGUNMA』には、

上野国は、信濃国などとともに朝廷直属の御牧（みまき）※設置4カ国の一つとして、毎年50頭の馬を朝廷に献上する国でもありました。

と書かれています。群馬はヤマト王権から遠く、行き来するのにも時間がかかります。たとえ朝廷直属の御牧だったとしても、なぜ朝廷からとても遠い群馬で馬を飼育していたのでしょうか？

※御牧…牧を尊んで言う語。古代の朝廷の直轄牧場。(コトバンクより)

私は、群馬が馬を飼うのに適した場所だったのかを知るため、馬の飼い方について調べてみました。

馬の飼い方

・馬房…馬がご飯を食べたり休んだりする大事な場所なので、大きさは飼育する馬の大きさに合わせて十分な広さで作しましょう。

・運動場…大きさは飼育する馬の大きさにもよりますが、20m×60mは欲しいところです。小さくても直径15mは確保しましょう。

・馬の洗い場…大きさは2m×3mもあれば十分です。

・エサについて…栄養ビタミン剤を含む濃厚飼料を一日に1回、乾牧草(青草)を一日に数回与えてください。水は常に新鮮なものが飲めるよう、バケツに入れておいてあげましょう。(Pet Pedia、農業生産法人 日高馬一ちゃんだいず(株)より抜粋)



現在の馬房の様子(画像②)

馬を1頭育てるだけでも、「広い土地」、ビタミン剤が存在しない当時には「栄養のある草」、「新鮮な水」が必要とされます。毎年50頭の馬を献上するために多くの馬を育てるとなると、自然が豊かな、とても広い土地が必要となってきます。群馬は、利根川や渡良瀬川、尾瀬や緑のある山々などの自然が現在でも豊かなため、また、群馬の南東の方角には関東平野が広がっているの、馬を育てるのに適していたと思われます。

さらに、東国文化副読本には群馬で飼育が盛んになった決め手として、

「馬の飼育や生産の先進技術を持った渡来系の技術者集団の存在」

と書かれています。

3 考察「なぜ群馬から出土した馬形埴輪の数は全国的に多いのか」

・①、②の調査結果からの考察

①「馬は権力の象徴だった!？」についての調査では、「ヤマト王権は朝鮮半島(高句麗)の騎馬戦戦力の強さに触れ、馬を取り入れた(5世紀はじめ~中頃)。その後、ヤマト王権から日本全土(特に東日本)へと馬が広がった。朝鮮半島と繋がっているヤマト王権から伝わった馬=朝鮮半島と繋がっているヤマト王権と繋がることのできる、つま

り、間接的に日本より文化が進んでいる朝鮮半島と繋がることができるといこと。馬を手にすることができれば、自分たちより身分が高く文化が進んでいる国と繋がることができるといことになるので、馬は最先端の乗り物として財力と権力の象徴になっていた。」と考えることができます。

②「群馬県では馬を飼育していた!?～なぜ群馬で?～」についての調査では、「上毛野国は、自然が豊かで馬を飼育するのに適した土地であり、馬の飼育や生産の先進技術を持った渡来系の技術者集団がいた。だから、朝廷直属の御牧の一つとなり、その結果毎年50頭の馬を朝廷に献上する国となった。」と考えることができます。

・「古東山道ルート」について

今回調査のために訪れた群馬県立歴史博物館には、右に示す資料がありました。5世紀中頃には、ヤマト王権が馬を大阪で飼育していたようです。後半になると、ヤマト王権は東国へ政治的影響力を強め、上野国での馬の飼育が始まったそうです。馬が日本に導入されたため、ヤマト王権すなわち近畿地方から上毛野地域へと至る「古東山道ルート」ができました。これは馬が導入されなければ可能とならなかった、と資料に書いてあります。馬のために、遠く離れた内陸地域を結んで往来できるような幹線道路ができ、ヤマト王権の支配エリアが東国にまで広がったのです。

馬文化と内陸ルート

剣崎長瀬西遺跡(高崎市)では5世紀後半の馬を埋葬した土坑が見つっています。遺体には轡が着けられていました。この頃、上毛野地域では馬の飼育が本格的に行われていたようです。剣崎長瀬西遺跡では、方形積石墓や金製垂飾付耳飾、朝鮮半島系の軟質土器なども見つかり、多くの渡来人が住んでいたことが明らかです。そうした人々の移住とともに馬文化が伝わったと考えられます。

朝鮮半島から伝わった馬の飼育は、まずヤマト王権により、5世紀中頃に河内平野(大阪府)で始められました。その後、5世紀後半には上毛野地域や信濃地域(長野県)の伊那谷で馬飼育が始まります。こうした内陸部での馬飼育から、ヤマト王権が東国へ政治的な影響力を強めていたことが読み取れます。また近畿地方から上毛野地域へと至る内陸の「古東山道ルート」の利用は、馬の導入により可能になったともいわれます。

古墳時代の馬の大きさ

古墳時代の馬は、日本に在来する木曾馬(長野県)のような体高110~130cmほどの小柄な馬であったことが、出土した骨や蹄跡などから推定されています。サラブレッドに比べ、頭が大きめでずんぐりしていたようです。



・当時「馬」はどんな存在だったのかについての考察

私は、①、②の調査結果に加え、古東山道ルートの資料から、当時の群馬の人々にとっての「馬」とはどんな存在だったのか考えてみました。

1つ目は、「馬」は、古墳に埋められた王の権威を示す重要な動物だったということです。そもそも、埴輪は、王の眠る古墳という聖域を守ったり、自慢の馬や武器を並べて権威を示したり生前行った儀式の様子を表したりするために作られたとされています。また、古墳時代、馬はヤマト王権とのつながりを示す動物でした。そして、馬は5世紀のはじめに日本に伝わってきたと考えられています。だとしたら古墳時代の人たち

にとっては、とても新しく珍しい動物、ということになります。だから、馬を飼育していた群馬では、自慢の馬を埴輪にして並べることで、権威を示したかったのではないのでしょうか。

2つ目は、「馬」は、遠く離れた群馬とヤマト王権との時間的な距離を大幅に縮めた動物だったということです。群馬から奈良までの、距離は494.8kmで、とても遠いです。行くのにかかる時間は、自動車だと約8時間、徒歩だと約100時間です（Google調べ）。古墳時代では、奈良まで何かを届けたり用件を済ませるためには、徒歩で行くしかありませんでした。しかし、馬が伝わったことにより、徒歩で行くよりも



も何倍も移動時間が短縮され、「古東山道ルート」もでき 群馬から奈良への道のり (画像③)

ました。馬が伝わると日本に新しいものがたくさんできました。このように、当時馬が大活躍していたことが分かります。だから、群馬では馬が埴輪に多く採用されたのではないのでしょうか。

4 まとめ

今回、私は「なぜ群馬で馬形埴輪がたくさん出土したのか」という疑問をテーマとし、2つの観点をもとに、より深い調査を行い、さらに群馬県立歴史博物館で得た「古東山道ルート」の資料とともに考察しました。

2つの観点である①「馬は権力の象徴だった!？」②「群馬県では馬を飼育していた!？～なぜ群馬で?～」の調査では、『5世紀のはじめ頃、朝鮮半島から日本に伝来した馬は、当時大きな権力を持つヤマト王権に最初に伝わった。ヤマト王権は馬を飼育する条件が揃っていた群馬（上毛野国）を朝廷直属の御牧の1つとした。そのため、群馬には多くの馬が飼育された。ヤマト王権から導入された馬は、権力の象徴であった。』ということがわかりました。このことから、群馬県に馬形埴輪が多いのは、王が権力をアピールするためである、と考えられます。

さらに、「古東山道ルート」の資料を合わせると、『馬の導入により、ヤマト王権（近畿地方）と群馬を繋ぐ「古東山道ルート」ができた。そして、馬は移動の手段として有効に使われ、時間短縮に役立った。』ということがわかりました。このことから、馬は、当時の生活を大きく変化させるほどの影響力を持つ動物であったため、群馬県では馬形埴輪が多く作られたと考えられます。

5 感想

今回、私は、馬形埴輪について調べました。調べるにあたって、初めて群馬県立歴史博物館や観音山古墳に行きました。普段だったら行かないようなところだったので、ドキドキしました。

群馬県立歴史博物館では、馬や猪、鶏の埴輪や、人の形をした埴輪などたくさんの埴輪を見ることができました。その埴輪の中には、観音山古墳から出土した国宝埴輪もありました。観音山古墳は石室が崩れてしまっていたので、中に納められていた副葬品が、盗まれずに残っていたそうです。右の写真の埴輪も、観音山古墳からそっくりそのまま出土したそうで



観音山古墳から出土した国宝埴輪（写真②）

す。歴史博物館では埴輪だけでなく、他の時代（縄文時代～現在まで）の群馬のことも知ることができ、とても勉強になりました。

群馬県立歴史博物館に行った後に、観音山古墳にも足を運びました。観音山古墳は思っていたよりも大きくて、とてもびっくりしました。頂上に登ると古墳は、きれいな四角と丸になっていることが分かりました。精密機械もなかった時代に、よくこんなものが作れたなと感心しました。石室の近くまで行ってみたら、中から涼しい風が吹いてきて、少しゾツとしました。



観音山古墳（写真③）

今回の調べ学習を通して、私は古墳が意外と身近にあるものだと知りました。一見、少し盛り上がっただけの地形に見えても、実は古墳だったりします。今まで、近所のショッピングモールに行くときに見かけていた小山が、東国で一番大きい天神山古墳や女体山古墳があることを知りませんでした。今度、天神山古墳にも行って、石室や景色を見てみたいです。これからも、古墳などの群馬の歴史を調べたり見たりしていきたいと思います。

6 参考文献

・群馬県

『東国文化副読本』（2021年度版）

<https://hani-gunma.jp/2021gunmatougoku/top.html>

『歴史を語る「ぐんまの埴輪（はにわ）」』2

https://www.pref.gunma.jp/07/b21g_00310.html

『もっと埴輪（はにわ）について学んでみよう！』

https://www.pref.gunma.jp/03/c42g_00086.html

『メールマガジン「ぐん！とGUNMA」第238号 2012年11月15日』

<https://www.pref.gunma.jp/03/x4500019.html>

・岡山県吉代吉備文化財センター『乗馬の風習』

<https://www.pref.okayama.jp/site/kodai/636846.html>

・Pet Pedia『馬はどのようにして飼える？馬の生態から飼い方まで解説』

<https://petpedia.net/article/822/horse>

・農業生産法人 日高馬一ちゃんだいず（株）『お家で馬を飼う方法』

<https://www.merchandize-mart.com/original27.html>

・西日本新聞me『九州が握る日本人の謎 古賀英毅』

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/591652/>

・コトバンク「御牧」検索結果

<https://kotobank.jp/word/%E5%BE%A1%E7%89%A7-639575>

★お借りした画像

・画像①・・・岡山県吉代吉備文化財センター『乗馬の風習』 より

・画像②・・・joths『馬房（ばぼう）とは？馬房と厩舎の違い・馬房で注意する事とは？』

<https://www.joths.net/contents/column/2987/> より

・画像③・・・Google map（群馬県から奈良県）検索結果 より

★表紙の写真

・太田市「オクマン山古墳出土の埴輪飾り馬」 より

<https://www.city.ota.gunma.jp/005gyosei/0170-009kyoiku-bunka/bunkazai/nittabunka38.html>

★訪れた場所

・群馬県立歴史博物館

ホームページ→<https://grekisi.pref.gunma.jp/>

・群馬県綿貫観音山古墳

ご案内→<https://www.pref.gunma.jp/03/x4510004.html>